

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：34427

研究種目：基礎研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21310166

研究課題名（和文） 真珠・ナマコをめぐるモノとヒトの移動と国際関係

研究課題名（英文） A study on historical migrations of peoples in search of pearls, pearl shells and trepangs, and the dynamism of transnational relations

研究代表者 内海 愛子 (UTSUMI AIKO)

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・教授

研究者番号：70203560

研究成果の概要（和文）：アラフラ海を中心とする海域に着目し、1）真珠やナマコ等の海洋資源をめぐる織りなされてきた人の移動の諸相を、戦争の影響や国際関係、特に日本、オーストラリア、インドネシア間の相互の関係を踏まえながら明らかにし、2）それを通じて、明治以降から現代にいたる、国家の枠組みからではとらえきれないこの地域の位置づけと意味を探るとともに、3）海域（交流史）研究の新たな展開に向けた論点と可能性を提示した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the Arafura Sea area, we examined aspects of historical migrations of peoples across the sea in search of marine resources such as pearls, pearl shells and trepangs. We also studied the effects of the Pacific War as well as international relations among Japan, Australia and Indonesia on the movements of peoples and marine resources. Our research identified the geographic significance of the area, which is connected by the ocean to Japan, from the Meiji era to the present. We also have demonstrated effective approaches to area studies by re-examining the framework of national borders and have highlighted new perspectives and issues which can enhance the field of ocean area studies as it relates to interactions of people and the exchange of produce.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
22年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
23年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
年度			
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：1) アラフラ海 2) 真珠 3) ナマコ 4) オーストラリア 5) インドネシア 6) 日豪関係 7) アボリジニ 8) ボートピープル

1. 研究開始当初の背景

国民国家の枠組みにとらわれない地域史ないしは地域研究の必要性が唱えられて久しい。また、「海域世界」をキーワードに、「海」がつなぐ地域に焦点を当てた研究も増えてきている。しかし、かつて白蝶貝（真珠貝）を中心とする海洋資源の採取のために、少なからぬ日本人が出稼ぎに訪れ、住みついた「アラフラ海域」に着目した研究はほとんどなされてこなかった。

この地域への出稼ぎの歴史は、太平洋戦争の勃発により分断される。しかも、戦争中は、日本軍が連合国軍捕虜や現地住民（ロームシャと称された）を動員して、飛行場の建設などが行われた。戦後、豪州やオランダによる戦争犯罪裁判によって、これらの地域の日本軍の戦争犯罪が裁かれているが、その中にはダイバーの二世たちも含まれていた。出稼ぎの歴史と戦争裁判が、アラフラ海域で交差していたのである。

本共同研究では、こうした人の移動を多層的に読み解くことにより、海域交流史の新たな側面に光を当てることができると考えた。

2. 研究の目的

アラフラ海を中心とする海域に着目し、海洋資源等をめぐって織りなされてきた人の移動について、戦争の影響や国際関係、特に日本、豪州、インドネシア間の相互の関係を踏まえつつ、その諸相を明らかにする。それを通じて、明治以降から現代にいたる、国家の枠組みからではとらえきれないこの地域の国際関係の位置づけと意味を探り、海域（交流史）研究の新たな分析視角と今後の可能性を提示する。

3. 研究の方法

本課題には、歴史社会学、社会経済学、政治学、社会学、文学、歴史人類学を専攻しながら、日本、東南アジア、インドネシア、豪州を研究対象地域とする研究者による学際的かつ地域複合的な共同研究として取り組んだ。

内海（研究代表者）と村井（研究分担者）は、東部インドネシア（アンボン、ハルク島、セラム島・ゴロン島、アル諸島等）における真珠養殖やナマコ・白蝶貝の生産、交易状況の現状調査を行い、パラオとの関係の重要性を分析。また、パラオの調査では、水産資源省、マングローブ・珊瑚礁研究所などで関係資料を収集し、採貝夫の軌跡や南洋庁時代の交易状況を考察した。加えて、内海は、沖縄—豪州間のダイバーの移動に関連して、台湾の台湾史研究所などで総督府文書の史料調査を行い、植民地時代の動向を探った。

鎌田（研究分担者）は、豪州北部準州やキャンベラにて史・資料を収集し、真珠貝採取産業における日本人契約労働者の実状や、豪州北部の先住民族と日本人漁師との接触に関する考察を行った。

加藤（研究分担者）は、豪州や日本で関連の小説・回想記・ライフストーリー・記録書などを収集し、日豪伊三国間の語りを分析することによって、これらの地域に根ざした物語の再評価を試みた。

飯笹（研究分担者）は、日豪の教材における日本人ダイバーの記述に関して、また人の移動のなかでも特に豪州の本土ないし領土に漂着したボートピープルに着目して文献・資料の収集を行い、その歴史的な動向と現在の状況を考察した。

田村（連携協力者・海外在住）は、南洋真珠養殖をめぐる歴史的推移について、神戸、

志摩、東京および豪州のブルームとクリベイ、ダーウィンにおいて資・史料の収集と関係者への聞き取りを行い、明らかにした。

永田（連携協力者・海外在住）はトレス諸島の日本人コミュニティと先住民との関係、および 1950 年代に沖縄からパールダイバーとして濠州に渡った日本人に関して調査を行い、沖縄—豪州間のヒトの移動について新たな視角を提示した。

4. 研究成果

本課題の研究成果は、個々の研究者が学会報告や論文等で成果発表を行うとともに、共同研究の成果報告「真珠となまこから見るモノとヒトの移動—日本・インドネシア・オーストラリアの近現代史」(仮)として 2012 年度にまとめる予定である。

本共同研究の開始時点では、インドネシアにおける真珠・なまこ調査が先行していた。すでに 20 年以上、アラフラ海海域を調査してきた村井の先行研究があり、内海の「ダイバーたちの戦争」に関する研究があった。本共同研究ではこうした成果に、豪州側の新たな資料調査、証言を加えることにより、アラフラ海におけるヒトの移動や地域の交流史をより重層的にとらえることを目指した。

(1) 真珠養殖・ナマコ・白蝶貝等の生産、交易をめぐる状況

①明治以降、真珠関連産業は、日本・豪州・インドネシアの地域にまたがる一大産業だった。その歴史は、明治以来の日本とアジア・豪州関係史そのものでもある。資料収集と関係者への聞き取り調査により、戦前に隆盛を極めたアラフラ海での真珠貝採集産業と 1950 年代後半から豪州において始まった南洋真珠養殖産業の密接な関連が明らかとなった。さらに、今までほとんど知られることのなかった南洋真珠養殖産業の歴史を掘り起こすことで、日豪米の多国籍合弁事業と

して発展した養殖産業において、作業現場で技術やノウハウがいかに伝達され、共同作業者たちの異文化間のやり取りや交流の様子が明らかになった。これら成果は、グローバル化が進む現代の経済事業運営にも示唆をあたえるものである

②真珠貝産業におけるヒトやモノおよびカネの移動は、国家の国境管理の重要性を認識させる契機となった。特に 20 世紀前半の豪州においては、アジアからの契約労働者の入国管理や、領海・領海に近接する海域での水産資源管理が重要な政治課題となっていた。潜水技術の発展によって公海上での操業が可能となった 1930 年代は、アラフラ海において豪・蘭領東インド・日本船籍の採取船が競合し、豪・蘭・日の外交交渉の課題として認識され始めた。また、真珠貝価格の暴落を防ぐための採取量制限をめぐる、生産者（船主）とバイヤーの思惑が錯綜した。豪国内の採取量制限合意を嫌って、蘭領東インドへ船を移動させる豪の船主も登場し、対立は先鋭化した。

③1990 年代以降は、アラフラ海だけでなくインドネシアにおける真珠養殖業において、かなり大きな変化が生まれている。それは、1) それまでの日本の独占体制が崩れたこと、2) 天然種苗(稚貝)が病虫害の蔓延で採取できなくなり、人工種苗になったこと、3) 値崩れで経営が難しくなったこと、などがあげられる。一方、インドネシアのナマコは中国人の食の「拡大」の影響を受けて乱獲され、資源枯渇が心配されている。そのあおりでインドネシア漁民は豪州の北部海域やパラオにおいて越境採取活動を行っている。

④近年のパラオの漁業については、かなり衰退しつつあると言える。それは漁民自体の活動が衰退し、海外からの缶詰等水産加工品が輸入されているためでもある。真珠養殖は

もはや存在せず、上述のようにナマコ漁はインドネシア人漁民の不法操業があり、時に摘発されている。かつてのようなパラオと東南アジアを結ぶ海のルートはほとんど途切れていると言える。

(2) 日本人ダイバーの移動の軌跡——異文化間の接触と交流、戦争の影響

①かつて豪州の真珠貝産業においては、「有色人種」の入国管理が連邦政府の大きな関心事であった。また各州政府も先住民の管理政策において、先住民とアジア系契約移民の接触を管理・制限していた。他方、日本人漁師は豪先住民に対する偏見や差別意識を持ち、良好な関係を築いていたとはいえず、北部準州においては先住民による日本人漁師殺害事件も起こった。1930年代に豪北部近海の公海上で日本漁船による真珠貝採取業が活発化するにつれて、北部準州の行政府は、アボリジニ条例を適用して、日本人漁師の上陸や豪北部近海での日本漁船の活動を制限した。

②明治以降、木曜島への採貝ダイバーの出稼ぎからはじまった南方進出は、蘭領東印度のアル諸島、ブトン島などへと広がり、採集も白蝶貝からナマコ・フカヒレなど南洋海産物へ拡大していった。出稼ぎから定着し、家族を形成する者もいた。しかし太平洋戦争の開戦により「敵国人」となった日本人とその子供たちは強制収容され、その一部は豪州に送還・収容されている。豪州は戦後、収容されていたダイバーたちの在留を認めなかった。ダイバーやその子供たちの中には日本軍の占領に協力したため、敗戦後、戦争犯罪人として裁かれた者もいるが、戦争裁判関係資料からはこうした出稼ぎ日本人の存在が見えてこない。現地での調査ではじめてこの事実が判明した（現在、オランダの戦争裁判記録を調査中である）。

③トレス海峡で真珠貝採取業の主役を演じていた日本人労働者については、太平洋戦争勃発とともに全員抑留され、戦争終結後、日本へ強制送還された。戦後、豪州真珠貝会社の経営者たちは産業の復興を期待し、日本人ダイバーの復帰を豪政府に求めた。豪政府は戦後日本人の入国を全面的に禁止していたため、当時米軍の統治下にあった沖縄の漁夫を「沖縄人は日本人ではない」という名目で起用した。しかし、彼らのほとんどが契約満了以前に解雇され帰国させられた。その背景には、よく言われるように沖縄ダイバーたちの技術不足だけでなく、沖縄側の資料と関係者への聞き取りにより、アイランダー人労働者たちとのコミュニケーションの問題、設備の問題があったことなどが判明した。真珠貝産業はその後世界市場の変動と資源の消耗、代替原料との競合など、悪条件によって次第に崩壊していった。

④豪州、インドネシア及び日本を繋ぐ「ナマコ、真珠（貝）採取業」及び「太平洋戦争」をテーマにした文学作品や口承記録、その他関連の資料に表象される異文化間交流を分析した結果、文学作品やライフストーリーに描かれる歴史的背景、人々の実際的な関わりと記憶の表象の一側面が明らかになり、国の枠組みを中心にした歴史とは異なる、地域に根ざした物語の再評価をすることができた。そこでは太平洋戦争の記憶が強く残る一方で、戦前からのヒトとモノの行き来による異人種・異文化間の交流が構築されており、戦争や戦後の軋轢、また近年のブルームー和歌山県太地町姉妹都市関係への影響に見られるような捕鯨・イルカ漁の是非に関わる対立を超える繋がりが存在することが文学でも検証された。文学作品によるこの地域の交流史は他に類を見ず、ポストコロニアル状況にある環太平洋地域文学研究の新たな一面を

明らかにすることができた。

(3) 密航としての移動

①密漁は主としてインドネシアの海洋民であるバジャウ人によって行われている。スラウェシ島、ロテ島、フローレス島などが基地になっており、フカ、ナマコ、高瀬貝などが採取される。しかし豪州当局の厳しい取り締まりと厳罰の法的処置のため不法操業は減ってきている。

②漁船で移動するのは漁師やダイバーだけではない。「ボートピープル」に着目すると、海域（交流）史はまた違った様相を帯びる。1970年代より今日に至るまで、祖国の動乱から逃れ、安全な第三国で庇護申請を目指す幾多の人びとが、東南アジアから海路、豪州の領土に辿りつくことを試みてきた。小さなボートでの、そして近年では多くの場合、違法な手段で乗船を斡旋するインドネシア人身密輸業者が手配した小さな古い漁船での航海は、過酷で命懸けの移動に他ならない。かつてはインドシナ難民が中心であったが、2000年前後はアフガニスタンやイラク等の出身者が急増し、近年ではインドネシア領パプア（イリヤンジャヤ）やスリランカ等からのボートピープルが増えている（東ティモールからの難民は、独立以降はほとんどみられない）。

かれらの受け入れ、あるいは阻止をめぐるのは、豪州国内政治の争点となっているばかりか、豪州とインドネシア、さらには周辺、関係諸国の間で、熾烈なポリティクスが展開されてきている。この問題は、越境と管理の相克という視点から、海域の「境界研究」としてさらなる考察を進めていく必要がある。

(4) 今後の課題

①産業としての真珠養殖は、今では停滞期にあり廃業する業者も出ている。関連資料を廃棄される前にできる限り収集し、南洋真珠

養殖の歴史に生きた人びとの証言を記録化しておくことが求められる。関係者へのインタビューと資料収集を継続して行う。

②真珠・ナマコの国内調査を行っていく中で、海でつながる朝鮮半島との交流史がみえ、「缶詰」の歴史がうかびあがってきた。本研究の成果を踏まえて、明治以降のアジア、豪州、太平洋、韓国への日本人の出稼ぎと人びととの交流のダイナミズムへと、研究の射程を広げていきたい。

③海域の人の移動は、越境と国境管理の相克という政治的な側面を有している。今後は、海域の「境界研究」としても考察を深めていくことが重要であると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計4件）

2011年度

①加藤めぐみ「Letting Literature 'Speak' in Today's University Courses: An Example of Using Broome-Taiji Relationship」『南半球評論』27巻、2011年、41-48頁（査読無）

2010年度

②村井吉敬「海のアジア学の可能性と展望」村井編『アジア学のすすめ』2010年（査読無）

③鎌田真弓「戦時下北部特別地域のアボリジニ労働者」『名古屋商科大学論集』55巻、2010年、47-62頁（査読無）

2009年度

④村井吉敬「国と民がせめぎあう海域—水産資源をめぐる海の民バジャウのオーストラリア領域侵犯」『SEEDer』第1号、2009年、24-31頁（査読無）

〔学会発表〕（計5件）

2011年度

①村井吉敬「멸치(ミョルチ)に始まる韓国水産業探索」アジア地域における水産物グロー

バル化とその諸影響に関する研究会、2011年11月4日、早稲田大学

②加藤めぐみ「How to Let Literature Survive in University Courses in the Era of the Digital Revolution: In the case of Australian Literature in Japan」 The 14th Biennial Symposium on Literature and Culture in the Asia-Pacific Region、2011年12月5日、The University of Western Australia

③飯笹佐代子「多文化社会のシティズンシップ」カナダ学会・オーストラリア学会合同シンポジウム、2011年9月18日、大阪学院大学

2010年度

④内海愛子「日本の過去清算運動の流れと東アジアの平和」国際学術大会 韓日の過去清算と東アジアの平和、2010年8月28日、成均館大学（ソウル）

⑤村井吉敬「エビやナマコのこと；海と島の東インドネシアを歩いて」東南アジア学会特別講演、2010年12月4日、東洋大学

〔図書〕（計8件）

2010年度

①内海愛子「アジアの被害者の声を聞く」内海愛子、佐藤健生、ノルベルト・フライ編『過ぎ去らぬ過去との取り組み 日本とドイツ』岩波書店、2011年、281-301頁

②加藤めぐみ（監修、項目執筆）『新版 オセアニアを知る事典』平凡社、2010年

③鎌田真弓（項目執筆）同上

④飯笹佐代子（項目執筆）同上

2009年度

⑤内海愛子「サンフランシスコ講和条約と東アジア」岩崎稔・上野千鶴子他編『戦後スタディーズ』紀伊国屋書店、2009年、135-152頁

⑥内海愛子「資料 アラフラ海のダイバーたち—林春彦さんの証言—」鎌田真弓編著『戦争、市民、ネイション—オーストラリアの太平洋戦争』平成19-21年度科学研究費補助金（C）成果報告書、2010年、78-108頁

⑦村井吉敬『ぼくが歩いた東南アジア』コモンズ、2009年、238頁

⑧加藤めぐみ「多文化社会オーストラリアの現代文学」早稲田大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究』オセアニア出版、2009年、185-201頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

内海 愛子 (UTSUMI AIKO)

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・教授

研究者番号：70203560

(2)研究分担者

村井 吉敬 (YPSHINORI MURAI)

早稲田大学・アジア研究機構・教授

研究者番号：40129797

鎌田 真弓 (KAMADA MAYUMI)

名古屋商科大学・商学部・教授

研究者番号：20259344

加藤 めぐみ (KATO MEGUMI)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：30247168

飯笹 佐代子 (IIZASA SAYOKO)

東北文化学園大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：30534408

(3)連携研究者

(4)研究協力者

田村 恵子 (TAMURA KEIKO)

オーストラリア国立大学・アジア太平洋学部・客員研究員

永田 由利子 (NAGATA YURIKO)

クイーンズランド大学・言語比較文化学科・シニア・レクチャラー